

R・V・サンブソン著 『理性の時代の進歩』

Ronald Victor Sampson, Progress in the Age of Reason. The Seventeenth Century to the Present Day. London, William Heinemann Ltd., 1956. pp. 256. (Heinemann Books on Sociology)

渡 邊 恭 彦

本書における著者の意圖は、市民社會の成立期から確立期にかけての近代ヨーロッパにおいてとくに指導的役割を演じた「進歩の理念」(idea of progress, idée de progrès)を歴史的に再検討し、今日新たな視點からその妥當性を問うことである。

ところで、この進歩の理念は、これまですでに多くの學者や思想家達によって問題にされてきたが、その研究は、意圖と方法において次の三つの傾向に大別できるように思われる。第一は、進歩の理念を歴史哲學史あるいは廣くヨーロッパ思想史の上に位置づけその意味と根據を問うことに研究の主眼をおくもの、第二は、進歩の理念の缺陷や時代限定性を充分意識しながらもそれのもつ人間中心的・現世的性格を積極的に「再評價」

(ギンスバーク)し、新たな時代における「進歩」の意味を摸索しようとする努力であり、第三は、進歩の理念を「攝理」の側から批判し、絶望と危機から人間を救いうる信仰を新たに確立しようとする努力である。第一のものにはフリント⁽¹⁾、ビュアリ⁽²⁾、セル⁽³⁾、マイネッケ⁽⁴⁾、アザール⁽⁵⁾、コリングウッド⁽⁶⁾、レーヴット⁽⁷⁾などの研究があり、第二のものにはマーヴィン⁽⁸⁾、ソレル⁽⁹⁾、ホップハウス⁽¹⁰⁾、ギンスバーク⁽¹¹⁾らの研究が、また第三のものにはドーン⁽¹²⁾、ベルジャーエフ⁽¹³⁾、ニーブル⁽¹⁴⁾、ケストラ⁽¹⁵⁾らの見解が屬するように思われる。これらのうちとりわけ第二・第三の諸研究には、ヨーロッパ文明に對する幻滅、資本主義の一般的危機の深化、社會主義の勝利、非ヨーロッパ社會の擡頭、人類共滅の危機と平和的共存への要請といった第一次および第二次世界大戦後の世界的諸問題に直面しての研究者・思想家達の切實な問題意識が顯著にあらわれていて興味深い。

さて本書の著者サンブソン⁽¹⁷⁾は、研究方法においては第一のグループに屬し、理解の仕方においては、第二の諸研究とりわけギンスバークのそれに近いように思われる。すなわち著者は、進歩の理念を十七世紀の科學的・合理主義的思想の出現から十八世紀の啓蒙主義的オプティミズムの完成にいたる歴史的發展のなかでまずその意味と限界を考察し、ついでその理念が十九世紀においてヘーゲルの歴史哲學やマルクシズムにいかなる影響をおよぼしたかを検討する。そして最後に著者は、今日のヨーロッパ人の思想と體驗にてらして「進歩」の道德的意味を問い、今日の危機を打開するための鍵を探る。著者はここで、進

歩の理念の歴史的考察を通じて二十世紀の社會學や社會哲學の基本的諸問題に對してと同時に現代の人間の恐怖と希望に對して解明の光をあてようとしている。

この書物は「序論」、「新し方法——科學と進歩」、「人間の完成可能性について」、「自然史」、「普通史」、「進歩の終末論」、「自然法の没落」、「歴史哲學」、「ヘーゲリアニズム」、「マルクシズム」、「結論」の十一章から成り、巻末には簡単な書目とくわしい索引が附されている。以下、コメントよりも紹介に重點をおいて各章の内容にあたってみたい。

二

著者は第一章の「序論」で歴史哲學の機能、種類、方法について見解を示したのも、啓蒙思想に對する今日の批判の意味について検討している。まず著者は、これまでの歴史哲學者をディルタイ、クローチエ、コリンダウツドのような「歴史的知識の性質および權威を検討する批判的活動に主として關心を抱く」「批判的」歴史哲學者と、コント、マルクス、シュベングラー、トインビーのような「歴史の進行の全般的方向に關する假説をたてることに主として關心を抱く」「思辨的」歴史哲學者の二つのタイプに分け、原則として「思辨的歴史哲學」は「批判的歴史哲學」と不可分の關係にあること、たとえ歴史の「法則」に關する假説を「歴史の知識に關する認識論的假定」なくしてたてることが可能であっても、觀念の體系を不完全な經驗的明證の上にならざることは危険であること、を強調す

る(一—二頁)。次に、歴史哲學は「歴史解釋の方法」を含むという考えのもとに、従来の歴史哲學を方法的に(一)神學のないしは形而上學的一元論の理論、(二)世俗的一元論の理論、(三)社會學的理論、(四)相對主義的理論、の四種に分け各々の特徴を例示する。そして著者は(四)にみられる「謙虚さ」に言及し、歴史の諸問題に對する判断はいかなる「價值判断」からも獨立していなければならぬ、という(二—四頁)。同様に歴史敘述における史實選擇の基準の問題に關しても、「關心」とか「見通し」とかの「主觀性の要素」はむしろ必要不可欠であることを認めるがしかし、事實は「事實それ自身の論理」によつて判断されるがばならないのであつて自己の「價值」を過去に投入したりすることによつて判断されてはならない、と獨斷的な價值判断の排除を主張する。かくして著者は、J・S・ミルトともに事實の經驗的・相對的判断の重要性を強調している。著者にとつてはそのような判断こそ「歴史哲學の機能」を構成すべきものである(四—六頁)。次に著者は、「革命的マルクシズム」と「自由主義的進歩主義」(ミル、モーリー)は啓蒙時代の「落し子」であつてそれへの「反動」ではないことを指摘しつつ(六—七頁)、啓蒙思想に對する今日の批判が、テーヌやブリュンチエールやファゲの場合のような啓蒙思想の尊大さと淺薄さに對する反撥とは異つて、その皮相な理想と流行おくれの價值基準とに對する嘲笑と今日の人間の希望の喪失とそれらの結果としての信仰の復活とによつて行なわれていることを示す。そしてその例としてベルジャエフ、ケストラ、トインビーの

信仰や幻滅感を擧げる。(八一十頁)しかし著者は、まさしくこのような時代にこそヨーロッパにおける十八世紀の傳統を検討し啓蒙思想家達が絶對主義と宗教的不寛容の時代に行なったことを正しく理解することは至當である、とのべている。著者のこの主張の背後には十八世紀の傳統の連續性に對する確信とその傳統を積極的に繼承せんとする意欲がひそんでいるように思われる。

第二章は、進歩の理念の出現が「新しい方法」すなわち神學的思惟方法に代る經驗主義的・合理主義的思惟方法の出現といかに密接な關係をもっていたかを論證しようとしている。著者は、十三世紀から十七世紀の間に生じた經驗的探求方法の發見、機械技術の發明、地上世界の擴大、宗教改革者達によるカソリック的キリスト教世界の統一性の破壊、古代の學問の復活とその超克の努力、富と餘暇の増大といった事實が人々に前代未聞の明るい自信とあくことを知らぬ好奇心や探求心をふきこんだこと、しかしそれにもかかわらずなおもキリスト教神學が科學的探求の發展を妨げキリスト教的終末論が現世的價值と世俗的世界の歴史への關心を皮相なものにしてしたこと、従つて彼等の進歩の理念は歴史的事實の觀察によつてではなく人間の本性の研究から生じたものであつて元來非歴史的な性格のものであつたことを、ペーコン、モンテーニュ、デカルト、パスカルらの思想を検討することによつて示している。その際著者は、ピュアリが進歩の理念の發生の條件として古代への知的隷屬の破壊、現世の幸福の尊重、自然法の恆常性への確信、慣習

の打破と個人の解放の四條件を擧げたことの正當さを論證している(二〇一—二一頁)。

第三章では著者は、ロック、スミス、ブリストリ、ハートリーを、またコンディヤック、エルヴェシウスを検討しつつ、彼等がなお神學的・形而上學的要素を残しながらも、あるいは經驗論や感覺論を基礎としあるいは功利主義的社會道德論の形で、「人間の完成可能性」の觀念と確信とを形成していった過程を示す。また彼は、ゴッドウィンが一方でロック、ハートリー、ドルバック、ルソー、エルヴェシウスらの影響をうけそして他方でフランス革命の現實を眼のあたりにして「人間の完成可能性」を信じ人間完成の過程として知識の増大、教育の普及、政治的正義の實現に期待をかけるに至つたことを示す。しかし著者は、彼等のすべてに知識の増大が直ちに人間の幸福を實現するという手放しの前提があり、その點で彼等は道德を心理學と同一視し事實と價值との間の明確な區別を行なつていなかったことを指摘し、彼等の樂觀主義を批判して次のようにべている。「たとえ人間の知識の増大が不可避免的に人間の境遇の改善をもたらすとしても、またたとえ人間の力の増大が人間の幸福を増すとしても(そしてこれらの假定はいずれもはやかつて十八世紀に與えられたような普遍的な同意を要求することはできないであろう)、人間の幸福が地上の生活の至上の價值だという信念を我々が無批判に受入れないかぎり、人間の本性は常に知識の増大を可能ならしめる性質のものだからといって人間は生れながらにして進歩する動物であると結論するこ

とはできない。」(六四頁)つまり、理性への信頼と幸福至上主義のために、十八世紀の誰一人として人間が自己の知識と力を自滅のために使うことがありえようとは想像できなかった、というのである。

第四章では、いわゆる「自然」が十八世紀の哲學者達にとつて「賓客」(Guest of honour)としての役割を演じたこと、すなわち「自然」への訴えは不安と不満にみちた時代においては既成の慣習と慣例よりも一段高いものを規範的原理として求める改革的批判の一つの手段であったことが、デュガルド・スチュアート、フォントネル、ルソー、デイドロ、ラフィット、コンディヤック、ダランベール、ファーガソン、ヒュームらの思想を通じて示される。著者は、彼等によって「自然」は(一)人間のなしうる最善のものが人間にとって最善だという意味に、(二)文明に對する原始、複雑なものに對する單純なものの意味に、(三)超自然的で異常なものに對して嚴密に觀察された因果關係に従うものの意味に用いられたこと、そしてこれらの自然概念が(一)各人の従うべき相對的價值基準を、(二)人間は原始状態から様々な段階を経て進歩・發展しつつある動物だという考えを、(三)人間の世界に自然法則と同一の規則性を求めようという考えをうみ出したことを指摘している(六七―六九頁)。著者は、右の思想家達の自然概念のうちにデカルト的な演繹的思維方法とオプティミズム(目的論的自然法への信仰)がなおも強く認められることに注意を促している。

第五章。この章における著者の主眼は、現代の歴史敘述とは

異つて十七・八世紀の「普遍史」敘述には何らかの歴史哲學が暗黙のうちに不可分の形でとり入れられていることを示すことにある。著者は、ボーダン、ボシユエ、ヴォルテール、シャトリュユ、コンドルセらの人類の「普遍史」敘述の目的と方法を問うことによつて、そこに共通に認められる幾つかの傾向、すなわち、人類の歴史を個人もしくは國民の歴史とパラレルに取扱いうるという前提、歴史を人類教化の素材とみる啓蒙主義の歴史意識、古代に對する近代の優越の主張、人類發展の因果法則を歴史の中に求めようという確信、歴史の究極原因を完全に人間の要素ではなく攝理あるいはそれに似た超人的要素に求めようとする努力、およびこれらの限界を指摘する。しかし「あらゆる啓蒙精神の流れが一すじの奔流となつて注ぎこんだ」(一一九頁)コンドルセについては、著者は、その普遍史敘述の力點が過去よりも未來の人類の進歩の豫想におかれていること、自然科学の方法からの類推によつて歴史の主流の不可避的なコースを豫言しようとする試みが意識的に行なわれていること、彼のきわめて明るいオプティミズムは同時代の人々は史上最大の革命のうちに生きているばかりかその革命の特殊な意義を理解するにたる知識をもちあわせているという彼の確信にもとづくものであったこと、従つてまた進歩の漸次的・連續的性質を強調しながらも現實には歴史の激變的側面をも進歩とみなす考えをもつていたこと、そしてそこには知性主義が經濟的基準にとつて代っているとはいへ、後年のマルクスの理論に對する親近性が胎芽の形でみとめられること、をとくに強調してい

る(一二〇頁)。

「進歩の終末論」と題する第六章では、著者は、プラトンからフェヌロンにいたるユトローピア物語の歴史を念頭におきつつメルシエ、レティフ・ド・ラ・ブルトンヌ、モレリ、コンドルセ、ヴォルネイ、ゴッドウィンらの十八世紀におけるユトローピア的作品の基本的性格を検討する。そして第一に、それらの作品はまったく架空の場所や時を設定するのではなく歴史の未来のなかに舞臺を設定していること、第二に、彼等の未来像は單なる想像的豫言ではなく科學的論據をもっていること(とくにコンドルセの場合)、第三に、しかしそれにもかかわらず未来の黄金時代への白晝夢としての性格が濃く残っており、そのことは歴史の進行過程のなから發展の一般法則を歸納させようとする努力の成功を證明するものではなくて彼等の欲求不満を、すなわち絶対王制の重壓にもとづく心理的抑壓の強さを、従つてまた現實から未來へ逃避せんとする憧れの強さを證明するものであったこと、さらに第四に、彼等の過去への訣別と未來への信頼は深遠な形而上學的欲求をみたすのに役立ち、かくしてここにキリスト教的終末論と進歩の理念とが結合され終末論的進歩史觀が形成されたこと、を指摘する(一二四—一二八頁)。著者はとくに最後の點に關し終末論的進歩の理念がフィロゾフ達に對してもつていた意味を次のように解釋している。フィロゾフのうち誰一人として人生の眞の意味を問おうとしなかつた、彼等は人生をキリスト教神學によつて意味づけしたにすぎない、なるほど彼等は人々の憧れを永遠的なものか

ら地上的なものへと向け變えることに成功したがそのためには彼等は人生に目標はないのだ、その目標が地上で立派に實現されることを望むのは道理にかなつたことだと考える必要があつた、その際彼等は、その目標は他人の犠牲と贖罪によつてではなく人間の完成可能性の能力(理性の潜在能力)によつて實現されるべく豫定されていると考へた、がそのことは彼等が精算しようと望んでいたまさにその傳統によつて基本的前提を形作ることであつた、かくしてデイドロに典型的にみられるように未來の進歩と後世への期待はフィロゾフ達の「救い」となつた、と(一二八一—三〇頁)。サンブソンは、進歩の終末論の心理學的・形而上學的役割をこのように理解した後、人類的「終末」(Last state)がフィロゾフ達にとつていかなる性質のものであつたかを検討し、結局それは、人間の自然權としての自由・平等・幸福および教育がよき「制度」を通じて實現されるといふことであつた、とのべている。ところで彼は、このような合理主義的な自然權の思想が定着しはじめたまさにその時、ヒューム・ホッブズ流の自然主義的な道徳および政治理論がそれへの「對立物」として現われてきた、とみている(一二三九頁)。

第七章。著者はまず自然法思想の特徴を次の四點に要約する。(一)ヨーロッパ的價值意識の本源的・前提をなしていたこと、(二)紀元前三世紀より十八世紀まで比類なき連續性を思想史のなかで示したこと、(三)人間の自然權への個人主義的信仰の形で急進的・進歩的運動のなかで指導的役割を演じたこと、(四)從

ってそれへの攻撃は権利の自明性を弱め道徳的・政治的價値の基本構造のなかに大きな間隙を残したこと(一四三頁)。次いで著者は、あらゆる自然法理論にみられる「存在」(Se)から「當爲」(Ought)への、また「不完全なもの」から「完全の絶對的規範もしくは基準」への訴えとしての、従って「存在」が「當爲」と峻別され對比されるところの二元論としての基本的性格についてのべた後、この合理主義的價値理論がいかに經驗主義者達によって批判を受けたかについてのべる。とくに著者は、自然法理論における二元的價値理論がヒュームの自然法の合理的自明性への懷疑と自然主義的道徳論(經驗的・一元的價値理論)によって受けた打撃について詳説している。しかし同時に著者は、ヒュームはたとえ價値の客観性を自然法解釋の主観性から救ったとしてもなお理性の感情に對する作用・支配の問題を未解決のままに残した、と批判している。彼によれば「歴史哲學」こそヒュームによって破壊された價値の合理的基礎を修復しようとする試みであった(一五七頁)。

第八章。著者はまず、「いかなる思辨とも獨立に、しかし歴史の主要事件の入念な検討の結果として歴史のなかにある一定方向の流れを識別しようとする試み」としての現代の歴史哲學から理性の時代の歴史哲學を區別して「歴史から神託を讀みとりあるいは歴史から價値體系を引出そうとする試み」と定義した(一五八頁)のち、後者の目的論的性格を明らかにしようとする。テュルギーについては、フリントのテュルギー評價を批判し、彼の歴史哲學はロック・コンディヤックの經驗主義の傳

統の上にボッシュエを想起させるほどの神の攝理に對する深いキリスト教的信仰を結合したものである、という。プリーストリーについてはテュルギーの「攝理への信仰」に對する類似性を、カントについてはその「歴史的一元論の目的論への依存」を指摘し、またヘルダーについては、彼が人間の完成可能性を強調することによって自然界に對する人間の優位性を主張した點に彼の「目的論的歴史解釋の目新しさ」を認めようとしている。

著者は、これらの思想家達のすべてが、歴史の經過のなかに確認可能な法則が支配していることを信じていた點、また人間の發展過程における人間の闘争を重視していた點において、多かれ少なかれ十九世紀の歴史哲學を先取していたことに對してとくに讀者の注意を促している(一八二頁)。

第九章。この書物における著者の主張の一つは、十九世紀におけるマルクシズムの出現と影響力の増大は自明な自然權への信仰の崩壊にともなう幻滅感と密接に關係していた、ということである。著者はそれを論證するに先立ちこの章で、マルクシズムが出現する母胎となった十九世紀のヨーロッパとくにフランス・イギリス・ドイツにおける思想情況を考察する。彼は、大革命の餘波が革命家達自身の行き過ぎとナポレオンの專制的獨裁という形で現われたフランスにおける幻滅感が千のヒュームの懷疑論以上に自然權の自明性に對する信仰を弱めたこと、またイギリス經驗論の傳統の上に立つベンサム、ジェイムス・ミルの功利主義は自由主義的經濟理論と産業擴張政策との間の矛盾が激化するにつれてその内部對立を露呈したことを示した

のち、「マルクスの綜合」は理性に對する信仰をもちしかもこの二つの傳統を拒否する人々に受入れられた、とのべている（一八三—一八四頁）。次いで著者は、十八世紀の唯物論に對する「ヘーゲルの反動」を考察する。彼は、歴史を絶対精神の辯證法的自己實現の過程として理解しようとするヘーゲルの歴史哲學のなかにそれまでの進歩の理念にみられる二元論、すなわち「存在」と「當爲」、「事實」と「價值」の鬭争という二元論を克服しようとする努力がいかに徹底した形で行なわれていたかを示す。また、ヘーゲルの自由・必然・法・國家等の概念を分析し彼の歴史哲學の構造を検討する。續いて著者は、ディルタイ、クローチエおよびコリングウッドのヘーゲルの歴史理解の方法に觸れ、形而上學的觀念論者や反自然主義的歴史家達の議論の非決定論的性格と相對論的性格を指摘する（一九五頁）。さらに著者は、歴史における人間の意志の問題について考察し、意志的現象としての人間事象の非法則的・個性的性格を強調している（一九六頁）。著者はこの部分で、歴史的事實の一般化や體系化は精々「動向」(tendencies)の把握に限定される、といい、あくまで經驗的個性的な歴史把握の重要性を強調しているが、彼のこの主張にはとりわけコリングウッドやマックス・ウエーバーに對する共感がみられる。

第十章。著者は、歴史哲學としてのマルクスの辯證法的唯物論がヘーゲルの觀念論的辯證法と自然法理論の二元性を克服しようとする眞剣な努力であったことを示しつつ、その方法的效力と妥當性を検討しようとする。すなわち前者に關しては、

辯證法的唯物論が環境と意識との間の、また生産力と生産關係との間の關係の分析に方法上比類なき效力を發揮したことを「ドイツ・イデオロギー」や「經濟學批判序説」のなかから示しその社會分析の手段としての價值を高く評價する（二〇七—二一九頁）。しかし後者に關しては、非決定論的立場からその法則律的で豫言的な「經濟的決定論」の客觀性と科學性を否定するとともにマルクスの理論そのものの歴史的・相對的性格を強調している。そして次のようにのべている。「我々には明らかに歴史における各個人の意志の性質を知る能力がないということを考える時、もし比較的嚴密な法則にもとづく豫言の力を要求しようと思ふならば、幾千という個人の意志の相互作用の結果を決定する超欲動的要因 (extra-connative factors) が働いていると主張しなければならぬ。」（二二一頁）「かかる法則が存在しているという斷定は、實際、科學的假説ではなくて形而上學的直觀である。」（二二一頁）と。この議論は文章にひきつがれてさらに詳細に展開される（二三三—二三八頁）が、要するにサンブソンは、社會現象の把握については個人の意志の相互作用の研究を中心とする社會學的な研究方法を主張するのである。また著者は、「マルクスがケインズのごとき人間の出現を豫見しえなかつたことは十九世紀後半の資本主義の矛盾の確實な結果を豫言しようとする試みにおける一つの大きな缺陷を示している。」といひ（二二二頁）、ロシアにマルクシズムが急速に滲透したのは政治および經濟の分析の手段としての效力もさることながらロシア人の世俗的メシア思想に訴える

にとくに適していたからである、とのべている(二二四頁)が、これらの見解は著者の修正主義的立場を示すものである。

「結論」の部分では著者は、進歩の理念に含まれた理想および價値的目的論的性格を再検討しつつ正しい歴史認識の方法を検討する。彼は言う。「價値を進化の法則や歴史の法則の事實と同一視する者は、經驗的諸現象の敘述のなかに價値判断をもちこまざるをえなくなる。」と(二三九頁)。ではそれを避けるためにはどうすればよいか。彼はいう。「自己の文化以外の文化に對する過度の主觀的判断の是正策は緻密な社會學的研究のうち存する。」と(二四一頁)。また、「自己の文化のうちにみとめられる改善が全人類の生活を包括する進化論的法則の成果であると早合點しないための方策としてはそれにまさるものはありえない。」と(二四一頁)。かくして著者は、「正しい説明はなるほど我々の限られた研究および理解の手段のときどきあるところではないかもしれないが、結局それは、すべての現存國家あるいは獨立社會の性格および内部構造のいずれかに存するに違いない。個人の場合と同様國家の場合にも、行爲の結果は豫期する結果とは異なるのであるから〔主觀的判断の〕是正策は豫期されぬ諸事件の展開のうちに先天的な諸法則を探索することにではなく、社會的ならびに國家的諸集團の構造および人間行爲相互關係の複雑な性質についての緻密な研究のうちに存する。」と主張するのである(二三七頁)。續いて著者は、進歩の道德的意味を検討した後、今日においては「理性的倫理」(a

rationality grounded ethic)こそ進歩に對して眞の意味を與えることができるものである、と結論する(二四九頁)。最後に著者は、今日の平和の問題について考察し、平和の問題は結局「人間の意志への挑戦」であり、またその達成は大部分技術的・經濟的な問題ではあるがなお相當程度に道德的・政治的問題である、という。すなわち、今日永續的な平和を達成するためには相對立するものすべてが互に相手についての認識を深め、相手に對する疑惑と不安とを除去し、「知性によって恐怖と權力欲を克服する」ことが必要であり、もし今日眞の意味の「進歩」がありうるとすればそのような道德的・政治的な意味においてであろう、というのである(二五〇—二五二頁)。

三

以下、若干筆者の感想とコメントを記しておきたい。

本書の第一の特色は、最初にも指摘したごとく、強い現代的關心に支えられて書かれていることである。著者は、十七世紀から二十世紀にいたる多くの思想家達の進歩の理念を克明に検討することによって彼等のおののよとしての進歩の意味を究明しようとしているが、それはとりもなおさず、今日に生きる人間にとって眞に意味のある進歩とは何であるかを探るためであった。著者はとくに進歩の道德的意味を問い、理性的倫理の確立が急務であることを説いているが、それは今日の世界における價値意識の分裂のなから眞に統一をもった人類の目標を探り出そうとする切實な願望のあらわれである、と考えられる。そ

れはまた、二度の大戦によりおそるべき残虐と野蠻を経験しながらもそれに絶望しきることなく、人間の知性と意志への信頼をもち續けていこうとする眞剣な努力のあらわれであろう。周知のごとく、このような考えはバートランド・ラッセルやモリス・ギンスバークにも強くうかがわれる。ところで、この道徳的進歩と理性的倫理は、今日國際間において世界の世論に強く支持され、單なる道徳主義や知性主義に終らないためには、それが政治や經濟や科學の有するある種の自律性とどの程度融和し民族や宗教の歴史的多様性をどの程度カヴァーしうるかが問われねばならぬであろう。著者はこの點に關しては單に可能性を示唆するのみにとどまり具體的な見解を示していない。

本書の第二の特色は、歴史の客観的な認識方法を見出そうと努力していることである。著者は、從來の歴史哲學に多かれ少なかれみられる「存在」と「當爲」、「事實」と「價値」の混同や目的論的性格を繰返し指摘することによって獨斷的な價値判斷から自由な・經驗的で客観的な歴史の理解あるいは敘述の必要を説いている。それは、今日の世界の現實をリアルに認識するためにはどうすればよいかという問いと結びついているのであるが、しかし著者の提唱する社會學的方法是、歴史的法則的把握の可能性の否定と社會の靜態的な心理主義的分析の主張にとどまっていて、現實のダイナミックな動きの把握には缺けるところがあるように思われる。

第三の特色は、思想家達の取扱ひ方と評價の仕方のなかにあらわれている。たとえば、フィロゾフ達の未來への憧れと後

世への期待を心理的欲求不満と終末論の世俗化よってのみ説明したり、マルクスの歴史哲學を經濟理論や實踐活動と切り離してその妥當性を論じているのは一つの特色であり問題であろう。前者については、彼等の現實批判の意味と彼等のオプティミズムの歴史的・社會的根據が、また後者については、マルクスにおける歴史と理論と實踐の統一の努力がなによりも究明されねばならないであろう。著者は、マルクスの史的唯物論を「經濟的決定論」だとしてその客観性と科學性を否定したり(二一〇頁)、エンゲルスはマルクスの「經濟的一元論」を「稀釋した」(diluted)とのべたり(二〇九頁)、あるいはまた、資本主義の矛盾は社會主義や階級なき社會によつてではなくテクノクラシーを中核とする「管理的社會」(managerial society)によつて克服されると考え、マルクスがケインズの出現を豫知できなかったのは彼の大きな缺陷の一つであったと述べている(二二二頁)が、この理解や評價ははたして正當であるうか。この批判はあまりにも今日の視點に立ちすぎであり、またその批判には、福祉國家的環境に生活する著者自身のオプティミズムが強く投入されているように思われる。

(1) Flint, R., *History of the Philosophy of History*, 1893.

(2) Bury, J. B., *The Idea of History*, 1920; Dover Edition, N. Y., 1955.

(3) Séé, H., *Science et philosophie de l'histoire*, 2e éd., 1933. とくに第一部・第七章。

- (4) Meinecke, Fr., *Die Entstehung des Historismus*, 1936; Neue Ausgabe, 1959. ヲヾロ一八四頁。
- (5) Hazard, P., *Lacrise de la conscience européenne* (1680~1715), 1955. ヲヾロ三三三頁。
- ditto, *European Thought in the 18th Century*. From Montaigne to Lessing: transl. by Lewis May, 1954.
- (6) Collingwood, R. G., *The Idea of History*, 1946; Second Galaxy Printing, N. Y., 1957. ヲヾロ第五編第七卷。
- (7) Lawth, K., *Meaning in History: The Theological Implication of the Philosophy of History*, 1949. Weltgeschichte und Heilsgeschichte. Die theologischen Voraussetzungen der Geschichtsphilosophie, 3te Auflage, 1953.
- ditto, *Welt und Weltgeschichte*, 1957. 柴田謙「世界と世界史」一九五九年。
- (8) Marvin, F. S., *Progress and History*. Essays arranged and edited by F. S. Marvin, Oxford University Press, 1916; 5th impr., 1921.
- (9) Sorel, G., *Les illusions du progrès*, 3e éd., 1921.
- (10) Hobhouse, L. T., *Morals in Evolution*, 1951.
- (11) Ginsberg, M., *The Idea of Progress: A Reevaluation*, 1953.
- ditto, *Reason and Unreason in Society*, 1947; reprint, 1956.
- (12) Dawson, Ch., *Progress and Religion*, 1929.
- (13) Berdyaev, N., *The End of Our Time*, 1933.
- (14) Niebuhr, R., *Faith and History*, 1949.
- (15) Kostler, A., *Arrow in the Blue*, 1952.
- (16) 我が國における進歩の理念の研究については次の諸論文を参照。
上原專録著「歴史學序説」のうち第二部・第三「社會發展の法則と類型」一九五八年。
阿閉吉男著「市民社會の系譜」のうち「進歩の觀念」一九五〇年。
田邊義利「ヘンスカント社會學——フランクム社會學における l'idée de progrès の發展と現代的歸結」思想「九八」九九「一〇一」「一〇三號」一九三〇年。
- (17) サンプソンの詳しい經歷は分らないが、一九五六年當時はトリヌスタン大學の Lecturer in Government。他に「J. S. Mill: An Interpretation,」The Cambridge Journal, January 1950 なる論文を發表して居る。又母本書に引く Samuel Bernstein, "Some Recent Historical Literature," *Science and Society*, Fall, 1958, Vol. XXII, No. 4, pp. 335~339 に簡明な紹介がある。
- (18) サンプソン氏の點に関する最もすぐれた研究書として Carl L. Becker, *The Heavenly City of the Eighteenth Century*, 1932, 1955. 柴田謙「十八世紀の天國市」一九五九年。

- teenth Century Philosophers, 1932 を推賞している。進歩の理念をキリスト教的終末論の人間化あるいは「世俗化」とみる考えはレーヴイット (Meaning in History) や ブントマン (Bultmann, R. K., History and Eschatology, 1957、中川譯「歴史と終末論」一九五九年、九一―九六頁) の主張でもある。
- (19) 著者はデイドロの後世への信仰をチェーホフの未来への期待と比較している (一三〇―一三一頁)。
- (20) フィロゾフ達の「制度」への信頼とは對照的なものとしてサンブソンはドストエフスキの制度に對する非難をあげている (一三四頁)。
- (21) フリントはテュルゴアの歴史哲學が「含蕃の深さ」と「論理的「一貫性」」においてモンテスキューおよびコンドルセに卓越していることを強調し、コントに對する先取性を指摘している。前掲書、一〇九―一一五頁。
- (22) テュルゴアの場合、「攝理への信仰」を否定することはできないにしても強調しすぎることは危険である。なぜなら彼は、進歩の動因として純粹に人間的な要素を、たとえは情念や經濟的欲求を重視し、あるいは進歩の擔い手として民衆 (people) の力を重視しているのであるから。ちなみにビュアリは、テュルゴアの攝理への言及は「慎重な空世辭」(a prudent lip-service) にすぎない、¹ といっている。前掲書、一五四頁。
- (23) Bertrand Russell, Common Sense and Nuclear Warfare, 1959. 五へん第十章。
- (24) Ginsberg, M., The Idea of Progress, 1952 の第七章。ditto, Reason and Unreason in Society, 1956. とくに第三部、十五・十六章。
(一九六〇―三一三二) (一橋大學大學院學生)